

Title	「ジャプジー・サーヒブ」の翻訳について
Author(s)	溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学論集. 35 p.175-p.179
Issue Date	2007-03-09
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80018
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ジャプジー・サーヒブ」の翻訳について

溝 上 富 夫

On Translations of the *Japji Sahib*

MIZOKAMI Tomio

The *Japji Sahib* was composed by Guru Nanak, the founder of the Sikh religion. It forms the first part of the *Guru Granth Sahib*—the holy scripture of the Sikhs. It represents the essence of the Sikh thoughts.

Like many other religious texts from India, the *Japji Sahib* is composed in verse. Its other two notable features are conciseness and high contextuality. These features set the stage for multiple ambiguity and multiplicity of interpretation which in turn make the task of translating it into any language including Japanese a challenging one indeed.

In this note some of the examples of variations in interpretation in various languages are shown only from the *Mulmantra* and the first stanza of the scripture. Those languages are three European languages—i.e. English in which probably more than a dozen translations were published, French and Italian— and three Indian languages—i.e. Hindi, Bengali & Punjabi.

This is just the beginning of the work and scope may be left for further studies through comparison among those languages.

は じ め に

「ジャプジー・サーヒブ」はシク教の聖典『グル・グラント・サーヒブ』の最初の部分を構成する瞑想的賛歌集で、開祖グル・ナーナク（1469-1539）自身の作といわれている。筆者はこの和訳を『大阪外国語大学学報』第75-1.2号（1987）に発表した。その後、英語を始めとする諸外国語に翻訳されている多くの資料を手にすることができた（日本語に訳す際には、それらを参照しなかった）。

それらを比較して読むと、翻訳は一樣ではなく、さまざまな異なる語彙を使って訳され

ていることが判った。直ちに誤訳とはいえないし、訳者も訳された言語も異なるわけだから、翻訳が一様である方がおかしいのかもしれない。しかし、こういう宗教文献しかも韻文を訳すことがいかに難しいかがよく判る。違う解釈もありうることを知るのである。今、「ムールマントラ」と呼ばれる導入部と第一詩節だけを検証して、さらなる詳しい比較研究は今後の課題としたい。

参照した外国語訳はヨーロッパ語では、英語、フランス語、イタリア語、インド諸語では、ヒンディー語、ベンガル語、パンジャービー語である。この「ジャプジー・サーヒブ」の言語自体が中世のパンジャービー語の一種であるので、この場合のパンジャービー語訳というのは、現代パンジャービー語の口語訳のことである。英語の訳は恐らく数十種類あるが、筆者の参照したのは、比較的よく知られ、かつ入手しやすい次の6点である。なお、初めの（ ）はその文献の省略記号を表わす。(H)はヒンディー語 (B)はベンガル語、(P)はパンジャービー語である。

(英1) Harbans Singh Doaba, *Sacred NIT NEM*, Amritsar, 2nd ed. 1976

(英2) Gurbachan Singh Talib, *SRI GURU GRANTH SAHIB*, Patiala, 1984

(英3) W.H.McLeod, *Textual sources for the study of Sikhism*, Manchester, 1984

(英4) M.A.Macauliffe, *The Sikh Religion*, vol.1, Oxford, 1909

(英5) Teja Singh, *THE JAPJI*, Amritsar, 1924

(英6) Khushwant Singh, *Hymns of Guru Nanak*, Bombay, 1991

(仏) *JAP-JI Enseignement initiatique du Guru Nanak (XVI siècle)*, 1970

(伊) 不詳 (コピーによって入手したため)

(H) Sahib Singh, *Japuji Sahib Tika*, 8th ed. Amritsar, 2003

(B) Abinashchandra Majumdar, *Guru Nanak krit Japji*, Calcutta, 1324 (ベンガル歴)

(P) Manmohan Singh, *SRI GURU GRANTH SAHIB*, Vol.1 Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee, Amritsar, 1962

以下の説明において、原文はグルムキー文字を音声表記で示し、その右に筆者の和訳をのせる。なお、ヒンディー語とベンガル語の表記もこれに準じた。

ムールマントラより

「ムールマントラ」とは、基本的教義で「ジャプジー・サーヒブ」の導入部である。akāl mūrat ajūnī saib^ban gur prasād「その(=神)の姿は時を越え、生まれることなく自照である。神は師(グル)の恵みにより得られる。」

ここで問題なのは、グルとは誰かということ。一般的には「師」という意味で、初代グル・ナーナクから始まり、10代目のグル・ゴーヴィンド・シングに至る「教皇」または「法皇」をさす。筆者の訳語もあいまいでわかりにくい。しかし、このムールマントラの文章の主語は唯一絶対神であり、グルが人間グルであるはずはない。(英3)(英4)(英6)と(仏)はただグルとしているだけである。

(P) もグルをそのまま使っているが、「グル達の恵みにより」と複数になっているので、これでは、ますます人間グルと混同される。(英2) は holy preceptor (神聖な教師) または divine grace (神々しい恵み) としている。(英5) は the Enlightener and the Grace (啓蒙者であり、かつ恵み深き人) は, gur と prasād を同格のように解釈している。(伊) はグルを grande (偉大な) と訳し, misericordioso (哀れみ深いお方) と同格の形容詞ととっている。(B) は「あなた (= 神) は upodeṣṭa (助言を与える人) であり, kripamoi poromeśsor (慈悲深いお方) である」と神への呼びかけの言葉として訳してある。結局, (英1) の “He is realized by the kindness of the True God.” や (H) の jo satguru kī kripā se prāpt hotā hai (サトグルの恵みにより神は得られる) とあるのが一番正確な訳だと思われるが, サトグル (真のグル) とは明らかに神をさす。つまり, サトグルとは主語の「神」と同一であることを理解しなければならない。「神が得られるのは, その神 (グル) の恵みによる」という意味である。しかし, (英1) はその後の Nanak の説明のところで, わざわざ (Satguru) と注をいれており, 上の “True God” が開祖ナーナクの如く解釈しているのは, 混乱をきたすものである。

その後にある jap という語は, (英3) (仏) (伊) では無視されている。(英1) と (英4) では, “Repeat His Name” (主の御名を何度も唱えよ), (英2) では “prayer-chat” (唱和), (英5) では “meditation” (瞑想) とだけある。(英6) では, 上の gur prasād と関連ずけて, “By the guru’s grace shall thou worship him” (グルの恵みにより, 彼を崇拝せよ) と解釈している。(P) も「主を思念せよ」とあるが, (B) では, 主語を一人称にして「(私または私達は) あなたを崇拝します」と訳している。(H) では, 「この (= 本経典) すべての聖句の名前がジャプである」と説明している。

ādi sac jugādi sac hai bḥī sac nānak hoṣī bḥī sac 「神は初めから真理だった。この世の創造の前に真理だった。ナーナクよ。神は今も真理だし, 永久に真理だろう」

この詩における「ナーナク」であるが, これを筆者のように, 呼格のように訳しているもの (英4, 仏, 伊, H, P) と無視したもの (英2, 英3, 英5) 以外に, 「ナーナクいわく」としているもの (英1, 英6) がある。但し, (英1) では, ナーナクの前に括弧で「サトグル」とあり, あたかもナーナクが神であるかのような錯覚をあたえるのは, シク教の教義に照らすと明らかに間違いである。(B) も「ナーナクいわく」に近いが, 「永久に真理であろうというのがナーナクの嘆願」としている。

第1詩節より

socai soc na hovai je socī lakḥ vār 「何十万回考えても, 考えるだけでは主は得られない」における socai soc na hovai には, soc を「考える」ととるか, 「清浄」ととるかによって, 二通りの解釈がある。大体は「考えても」とか「瞑想しても」という風に解釈しているものが多いが (英1, 英4, 英5, 英6, 仏, 伊, B, P), (H) と (英2), (英3) は後者で, 「何十万回沐浴して身を清めても, 心は浄化できない」という意味にとっている。

なお、(英1)は主語を一貫して“mortal”(死すべきもの=人間)としているのは注目すべきである。また、(仏)では、「何十万回」を des siècles 「何世紀も」となっている。

cupai cup na hovai je lāi rahā livtār 「いくら沈黙を続けても、心の中は癒されない」の沈黙は瞑想と同じ、二番目の cup は安らぎと同義である。この意味に解釈したものがほとんどだが、(B)では「黙ろうとしても黙れない」としており、(英4)も「沈黙を守れない」としている。(伊)では、「私が沈黙しじっと神に注意を向けたとしても、私は沈黙し続けることはできない」となっている。(B)では、そのあとに「いくら瞑想に耽っても」とあり、黙ろうとしてもとの関係がわかりにくい。つまり、「いくら瞑想に耽っても」プラス「いくら沈黙を続けても、心の中は癒されない」のか、「いくら瞑想に耽っても」「いくら沈黙を続けても」プラス「心の中は癒されない」のかははっきりしない。(英5)は“...nor will the enquire ever cease by remaing silent” 「沈黙を守るだけでは、探究心が止まらない」となっているが、この探究心が止まらないということは、結局は、心の中は癒されないということになる。livt 罫を (P)では、lagātār (つねに)と解釈しているが、(H)では、liv=lau (強い愛着、この場合、神を思慕する気持ち) + tār (糸)と解釈している。(仏)では「exterieur 外面の静けさによって interieur 内面の平和を勝ち取ることはできない」とややニュアンスの違った意識がなされている。

bhukhiā bhukh na utrī je bannā puriā b'ār 「いくら世の財宝を積み重ねても、人はその飢えを癒せない」において、puriā をほとんどが「世界」と解釈しているのに対して、(B)のみは、puriā を「プーリー (ギーや油で揚げた薄いパン)」ととって、「たとえ、頭にプーリーを一杯運んでも、飢えはなくなる」としている。論理的にはそれでいいと思うが、他の言語の訳と余りにも変わっている。飢え=渴望の対象をはっきりと「神」としているものが、(英4)(英5)と(伊)であり、「真理」としているのが(英6)である。(仏)は bhukhiā bhukh na utrī を「人が世界のあらゆる豊かさを所有することで、満足を買うことはできない」とやや意識している。

sahas lak^h hoi ta ik na calai nāl 「人は数知れぬ智恵をもってしても、ひとつとして彼と一緒に〔主のもとへ〕行くものはない」この筆者の訳で「彼」は神のことであるが、nāl のをはっきりと「…といっしょに」と訳してあるのは、(H)と(P)だけで、前者は「私と一緒に」であり、後者は「彼と一緒に」としている。(P)は()内に「主のさばきの場で何の利益も得られない」と説明している。「行き先」をはっきり「来世」と記しているのは、(英1)(英3)(H)で、「解脱」としたものが(英2)で、他は「神を得る」としたものが多し(英4、英6、仏、伊)。(英5)の“not one will prevail in the end.” はやや曖昧な感じを与える。「智恵」を(英3)と(英5)は“cunning”(狡猾)と悪い意味にとっているが、現代のパンジャービー語の siānap には、悪い意味はない。(Punjabi-Engsih Dictionary Patiala, 1994, p.113) (仏)はこの「智恵」によって」という

のを avec un esprit totalement ingenu (全くの無邪気な心で) としている。

kiv sachiārā hoiai kiv kūṛai tuṭai pal 「いかにして人は正しくあり、虚偽の幕を破れるだろうか」 kūṛai pal は、英訳はほとんどが “veil of falsehood” “barrier of falsehood” としている。(英2)のみが “wall of illusion” としている。(伊)とインド諸語の訳もおおむね、そうになっている。(仏)は「誤謬の暗雲」としている。

hukam rajāi calṇā nānak lik^hiā nal 「ナーナクよ。それは神の御心によって書かれた定めに従うことによって〔可能となる〕」 calNA を文字通り、「歩くことによって」としたものが、(英3)(英4)(英5)(伊)である。(仏)は、「神の意志が我々の意志になるようにすることなのだ」としている。

(2007. 3. 9 受理)